第23期　日本語・日本文化研修コース（2003年10月～2004年９月）

籾　山　洋　介

第23期日本語・日本文化研修コースは，「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の３つを目標として，2003年10月～2004年９月の期間に行われた。学習者は13カ国，20名（インド：４名，中国：３名，タイ：２名，韓国：２名，ミャンマー：１名，インドネシア：１名，イラン：１名，カザフスタン：１名，アメリカ：１名，ハンガリー：１名，ロシア：１名，ウクライナ：１名，ブラジル：１名）であり，10名の教員が指導に当たった。授業は基本的に３クラスに分けて行った。

以下，主要なプログラムおよびアンケートの結果について概説する。

⑴　教科書による日本語学習（10月～４月）

『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』『現代日本語コース中級Ⅰ　聴解ワークシート』『現代日本語コース中級Ⅱ　聴解ワークシート』（いずれも名古屋大学日本語教育研究グループ編，名古屋大学出版会）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として，「プリテスト（予習のチェック）」「プリテスト：補足（連語など）」「復習クイズ」「読解シート」「文法補足説明」を使用した。また，３課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては，録音に基づき個別指導も行った。

⑵　入門講義・特殊講義（10月～４月）

日本に関する基礎知識を身に付けること，研究レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得することを狙いとして，「国際関係論」「日本語学・日本語教育学」「言語学」の３つの分野について入門講義（各科目90分×12回）を行った。なお，学生は３科目のうち２科目以上を選択することとした。

また，特殊講義（必修）として「日本語情報技術」（90分×15回）および「音声学」（90分×５回）を行った。さらに，「辞書」「日本文学」「日本の歴史」などについても90分×１～２回の講義を行った。

⑶　作文（研究レポートのための基礎訓練）（１～２月）

研究レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして，「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」などについて学習した。

⑷　発展読解・発展聴解（10月～４月）

発展読解として，新聞などの生教材の読解，本の読解（エッセイ・小説など，教員が用意したものの中から，学習者が興味のあるものを選択），特別読解（学生が自分で読解の素材を用意し，学生主体で行う授業）などを行った。また，発展聴解として，テレビ番組などの生教材を用いて，聴解力の向上を目指した。

⑸　スピーチ（10月～７月）

自国の紹介をはじめとする様々なトピックについて，学生がスピーチを行った（10分程度）。また，スピーチの録音に基づき個別指導を行った。

⑹　研究レポート（１月～７月）

学生各自がテーマを決め，教員の個別指導のもとで研究レポートを作成した。分量は原稿用紙換算で50～100枚程度である。研究成果は『2003～2004年度日本語・日本文化研修コース　研究レポート集』として発行した。また，中間発表会（５月，発表：12分／質疑応答：8分），最終発表会（７月，発表：10分／質疑応答：５分）を実施した。研究レポートの題目は以下の通りである。

アグラハリ・アプルワ（インド）「外来語について―分類と和語・漢語と外来語の類義語分析―」

アヤット・ホセイニ（イラン）「生成文法と認知言語学の比較」

エヴェツカ・オリガ（ウクライナ）「『砂の女』の主

人公としての「砂の女」」
袁鐘（中国）「グローバル化の中の日中関係」
カリベコウァ・ローザ（カザフスタン）「婉曲語法―言い換えの理由と分類―」
キョウ・カイエン（中国）「ボランティア活動を通して見た日本の大学生」
ケティミィン（ミャンマー）「ことわざからみる二国の文化　―日本とミャンマーの比較―」
ジョン・マイケル・ラウ（アメリカ）「日本語音声認識システムと日本語学習者」
ジン・ヒョンジョン（韓国）「村上春樹の『ノルウェイの森』論　―「死」を中心として―」
ゼンタイ・ユディット（ハンガリー）「新しい医療法としての全人的医療の始まり ― 江戸時代から明治への動きを中心に」
張楊（中国）「『キッチン』と『満月』における“死”と“生”」
ナッタポーン・パンサワット（タイ）「行列待ち現象―若者を中心に―」
ニシャ・パラメシワラン（インド）「夏目漱石『こゝろ』における先生の人物像　―その複雑な心理と性格をめぐって―」
バクレ・プラサード（インド）「「フリーター問題」をめぐって　―働き方とは何か―」
ブティ（インド）「日本の環境問題をめぐる住民・市民運動」
許京姫（韓国）「映画「ぽっぽや」の分析　―題名，対比，乙松の死，色，音を中心に―」
ムーシナ・イリーナ（ロシア）「日本語の歌のメロディーは歌詞のアクセントをどれだけ反映しているのか」
メーティニー・ヌッチャナーカー（タイ）「日本の童謡における擬音語・擬態語」
モリオカ・レイナルド・コウジ（ブラジル）「死語について　―人を指す表現を中心に―」
ユユット（スバン　ワーユ　エディ）（インドネシア）「「たけくらべ」 ―女性作家の目で見た遊郭―」

⑺　総合演習（５月～７月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして，新聞や雑誌の記事やテレビ番組などの生教材を用いて，総合演習を行った。テーマは「報道のあり方について考える」「変化する日本の政治」「スポーツ：心技体の世界」の３つである。各テーマの実施期間は１～２週間である。

⑻　その他

以上に加えて，独話練習，討論会（ディベート），ことばのクラス（ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム），定期的な漢字テストなども行った。さらに，本学の学部生向けに開講されている教養科目の１つである「留学生と日本：異文化を通した日本理解」にも参加した。

⑼　アンケート

2004年７月に，学習者に対して，コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下,「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて，アンケート結果を紹介する。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	0人	7人	13人